

[実践報告]

コロナ禍におけるホスピタルアート制作の方法と意義 — マスキングテープとフィルムシートの活用 —

田中 佳(徳島大学大学院社会産業理工学研究部・准教授)

永廣 信治(医療法人修誠会理事長、徳島大学名誉教授)

抄録

本稿ではコロナ禍においてホスピタルアートを制作するために新たに開発した方法を紹介する。

それはフィルムシートや粘着シートとマスキングテープを組み合わせ、院外で事前に制作物の準備を行ったうえで病院の現場での作業時間を大幅に短縮するというものである。元々、高齢者との共同制作において開拓していた方法だが、コロナ禍でも有用だった。

この方法を用いて実際にアートを導入した美波病院での制作について報告する。この時期は大学でも学生の課外活動が制限されていたため、各自が自宅でフィルムシートにマスキングテープを貼る作業を行った。ここでは木々の葉と海、砂浜の部分にフィルム方式を用いた。また粘着シートを用いた鳥、花、お遍路さんも事前に用意し、現場の壁でそれらを貼り合わせた。

また同院では、事後に無記名の職員アンケートを行った。その結果をまとめ分析することで今回の制作の評価を探り、今後の課題と可能性について考察する。

Key word

ホスピタルアート、マスキングテープ、フィルムシート、コロナ禍

はじめに

筆者は2018年度以降、徳島大学病院を皮切りに、学生と共にマスキングテープを用いたホスピタルアート制作を行っている[田中,2020-1]。いずれも既存の医療機関等の壁面にマスキングテープを使って壁画やサインを制作するものであり、壁面の大小や内容にもよるが、制作には一定期間、現場で作業することが必要になる。クリスマスツリーなどの季節飾りの場合は数時間で仕上がるが、階段や廊下の壁面の装飾には1回あたり3~4時間、述べ10日かそれ以上の作業時間を要した。

2020年に入り新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行により、医療機関は外部との接触をできるだけ遮断する方策を取らざるを得ず、アート活動の受け入れも軒並み停止となった。全国と比較して感染者数が少ない徳島県においても事情は同じであった。特にワクチン接種が進んでいなかった時期には医療機関におけるクラスター発生を抑えることが最重要課題であり、アートどころではないという雰囲気が全国的に定着してしまったように見受けられる。

こうした状況が半年以上続き、感染の終息を見通せないことが明らかになると、感染拡大防止のための制限は継続しつつも、閉塞した状況を打開する工夫も必要ではないかという流れが少しずつ見えてくるようになった。面会禁止で家族や知人に長いこと会えない入院患者はもとより、業務上も極度の緊張を強いられ、院外でもリフレッシュの機会を奪われていた職員のストレスは高まる一方であり、ここにアートが貢献できないかという思いを関係者の多くが持ったのではないかと推察する。

2020年秋に徳島県内の病院からホスピタルアート制作の依頼があった。やはり患者や職員のストレスの高まりを感じていた院長が、アートの導入によって気持ちを和らげられるのではないかと考えられたようである。徳島県でもたびたびクラスターが発生していたため、制作は感染の小康期に集中的に行わねばならなかった。また同院は徳島市内から離れていることもあり、これまでとは異なる制作上の工夫が必要と思われた。

本稿では、こうした条件を勘案したうえで採用したホスピタルアートの制作方法について報告を行う。また事後に実施した職員アンケートの結果の分析から、今回のホスピタルアート導入の意義と今後の課題について考察したい。

1. フィルムシートの活用

フィルムシートを用いた制作方法

上記の条件から、どのようにすれば現場での作業時間を短縮した上で効果的な作品を作ることができるかを考えた。休業日に1日だけ現場で作業するのが最も望ましかったが、学生の予定調整が難しく、1回数時間の作業を2、3回程度に分けざるを得なかった。

現場での作業を減らす代わりに、できるだけ院外での事前準備をして臨むことを基本路線とした。そこで採用したのがフィルムシートを活用する方法である。実はこの方法は、別の高齢者施設で行ったワークショップの結果を踏まえてすでに考案していたものだったが[田中,2021]、ホスピタルアート制作にはまだ本格的に適用していなかった。

開発の経緯を振り返っておく。2020年の年明けに介護老人保健施設「敬愛の家」(徳島県板野郡北島町)で、入所者の方と一緒に壁面装飾を試みた。年末にクリスマス装飾を行っており、これを正月以降にも残せるように一部をリメイクすることになった。この時、数名の入所者にも作業に参加していただき、わたしたちは初めて高齢者と一緒に壁面で作業を行った。全員80歳代から90歳代で、自ら立って歩ける方もおられたが、多くは車椅子に乗っておられた。壁に近づいて一生懸命手を伸ばしてテープを貼って下さるのだが、狙いの場所になかなか手が届かず、楽しそうにはしておられたが、少し辛そうでもあった。立って作業できる方でも、ある程度の時間継続して行うことは難しそうであった。

一方、その前年の夏に行われていたワークショップでは、机の上であらかじめ用意された下絵に自由にマスキングテープを貼っていく方法が取られており、参加者の熱心な取り組みぶりや集中力には目を見張るものがあった。

以上のことから、高齢者を対象にしたワークショップでは椅子や車椅子に座った状態で、机の上で安全に作業する方法が適していると考えられた。そこで考案したのがフィルムシートを活用する方法

であった。ここでいうフィルムシートとは、ラッピングや生花の包装、弁当やケーキなどの食品の乾燥防止や抗菌などの目的で使用される透明の薄いOPPシートである。大きさはさまざまあるが、わたしたちは20〜30cm四方のものを使用した。これを用いて壁面に木を制作することを考えた。制作の概要はすでに紹介しているが、今回は詳しく手順を説明する¹⁾。

1. フィルムを机の上に固定する。四隅をマスキングテープで軽く留めるだけでシートが動かず作業がしやすくなる。

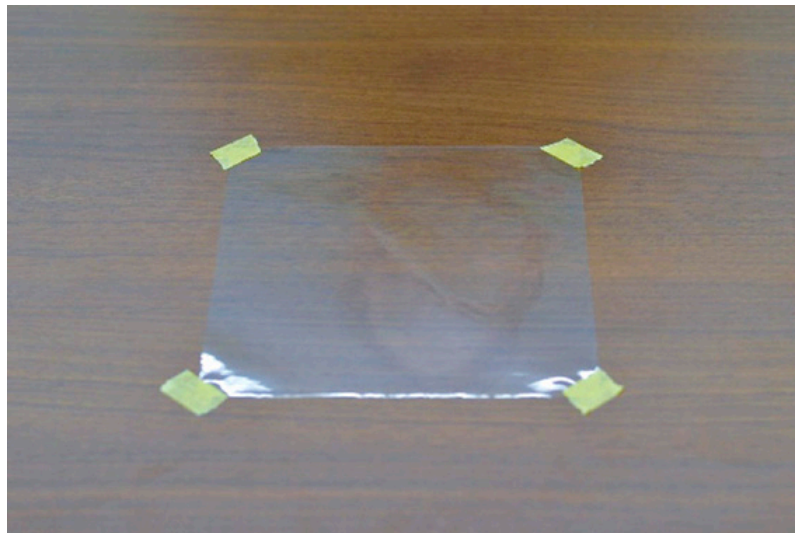


図1 フィルムの固定[撮影:川真田 彩]

2. 葉となる部分を作る。たとえば緑の葉の木であれば、緑の同系色のテープを数種類用意し、それらを手で小さくちぎってランダムにフィルムの上に貼る。フィルム全体がまんべんなく埋まるまで貼る。



図2 フィルムへのマスキングテープの貼付[撮影:川真田 彩]

- 3.壁面に木の幹や枝の部分を作る。この作業は職員など、壁面での作業が可能な人で行う。茶系や近似の色のテープを貼り合わせて形を取っていく。

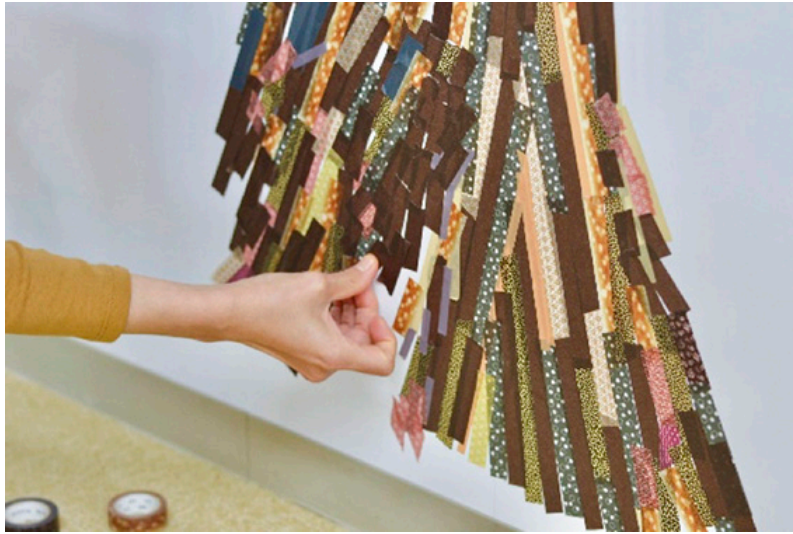


図3 壁面での幹や枝の制作[撮影:川真田 彩]

- 4.幹や枝の上に葉の部分を重ねる。3のシートを同系色のテープを用いて貼り合わせていく。すべて貼り終わったら、さらにテープを貼り足して全体の形を整えて完成。



図4 壁面でのシートの貼り合わせ[撮影:川真田 彩]

この手順により、病院に入院中の患者さんたちと桜の木を制作した。テープを細かくちぎって貼る方もいれば、うまくちぎれずに長いテープを貼られた方もいたが、全体を合わせると差異は気にならなくなった。木の幹や枝の部分の制作と、できあがったフィルムシートをその上に重ねていく作業は職員の方にも担当していただき、それぞれが役割分担して共同制作することができた。大学でも秋に黄色系のテープを用いて銀杏の木を、春にはピンク系のテープを用いて桜の木を制作した²⁾。

フィルム上にマスキングテープを貼ったものを学生がそれぞれ分担して自宅で制作しておき、現場では2〜3時間の作業を2回行うことで完成させることができた。シートを使わない方法であれば数倍の時間が必要だったであろう。



図5 銀杏の木(徳島大学フューチャーセンター ABA)[撮影:田中 佳]

フィルム方式の応用

このように、フィルム方式は事前に準備をしておくことで現場での制作時間を大幅に短縮できる。また付随する利点として、剥がすのが楽になるという点も強調しておきたい。細かいテープを一片一片剥がしていくとなるとかなりの手間になるが、この方式ではシートごとに面状に剥がすことができるので、たとえば季節毎のリメイク等に非常に適しているといえる。

さらに剥がしたシートを再活用する方法も提案したい。スクエア形のフィルムに同色系のマスキングテープがランダムに貼られたシートは、単体でもステンドグラスのような魅力がある。これを壁や窓に並べて貼るだけでも美しい装飾になる。目隠しにもなり、また光の強さにより色の具合が変わって見えたり、隙間からこぼれる光を感じたりと、さまざまな楽しみ方が可能である。レクリエーションなどでの制作物の保存や活用方法に悩むという話もよく耳にするが、この方法であれば別の場所に活かすことで長く楽しむことができる。



図6 窓に貼ったフィルム [撮影:川真田 彩]

2. 美波病院での制作

高齢者との共同制作のために考案したこのフィルム方式は、院外で制作したものを利用することで院内での作業時間を短縮するという、コロナ禍でのホスピタルアート制作に打ってつけの方法であった。先述の依頼先である美波町国民健康保険美波病院では、この方法を全面的に採用することにした。

徳島県南の太平洋沿いに位置する美波町は、2006年に海部郡日和佐町と由岐町が合併して新たに誕生した町である。合併後に老朽化が激しい日和佐病院・由岐病院を統合再編し、今後の発生が懸念される南海トラフ巨大地震や巨大津波にも対応できる病院を目指して新築されたのが美波病院である³⁾。このため同院は標高23mの高台に建設され、旧病院から臨むことができたという海の風景は失われている。院内は白と藍色を基調とする装飾のないシンプルな内装であり、清潔感が高い。

これまでの制作においても、わたしたちは何らかの形で地域性をアートに取り込むことを意識してきた。今回もこの方針に則り、院内のシンプルさや清潔さを妨げないこと、また当初の院長の思いを尊重し、院内の職員や患者への作用を特に意識することを心がけた。職員の方々の希望も取り入れ、アートの設置場所は1階の待合スペースおよび階段とした。

装飾場所とフィルム方式による制作

1階の待合スペースの主要な装飾は、職員通用扉付近に行うこととした。待合と職員専用スペースをつなぐ扉で往来の多い場所であることから、この周囲にアートを施すことで職員が気持ちよく通行できるのではないかと考えた。検査室前の待合の突き当たりでもあり、作業に支障が少ないこともポイントだった。

フィルム方式を活用して短時間で仕上げることを目指し、通用扉の周囲を木々で囲むデザインを考えた。先述の方法に則り、葉の部分は事前にフィルムを用いて作っておき、これを院内で貼り合わせるようにした。この時期は大学でも課外活動の制限があったため、学生の自宅にフィルムシートとマスキングテープを届け、制作例を共有したうえで各自10～15枚ずつ作った。幹の部分は現場で壁に直接作るようにしていたが、こちらもさらなるスピードアップを目指し、通常のマスキングテープよりも太い100mm幅のものを用了。このテープを使ってまず幹の部分を大まかに貼った後、あらかじめ作っておいた葉の部分のフィルムシートを貼り合わせ、最後に枝や全体の整形などを行った。



図7 通用扉周辺の木々(美波病院)[撮影:田中 佳]

同様にフィルム方式を使って、階段の踊り場の壁面に海の風景を表した。先述のように、この病院は海辺に近い場所に位置するにも関わらず、災害対策として山側に設置されているため海が見えない。このことを念頭に、近くにある有名な海岸「田井ノ浜」を踊り場いっぱいを作ることにした。水質が良く波も穏やかな田井ノ浜には海水浴シーズンのみ開業する臨時の鉄道駅があり、砂浜のすぐ横を線路が走っているのが特徴である。

これまでフィルム方式は木の葉の部分や桜といった、一色をベースとした部分にしか採用してこなかったため、海のようなカーブ状のグラデーションを表現するにはどうしたらよいか、色の組み合わせなどを慎重に検討した。現場の壁面は藍色だったため、深緑色のカッターシートにテープを貼って使用するテープを決めた。これまでのように同系色のテープを適当に貼るという自由度をここでは制限し、あらかじめ決められた組み合わせのテープをフィルムに貼るようにした。また砂浜の部分も同様にフィルム方式で制作した。

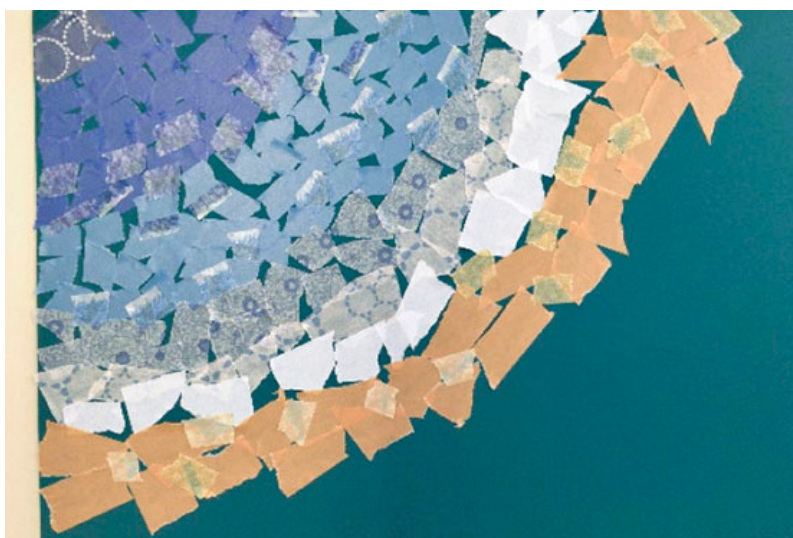


図8 海のグラデーションの検討 [撮影:田中 佳]

現場では、まずグラデーションの割合やカーブの形状を決めて目安テープを貼った上で持ち込んだフィルムを貼り、余分な部分はカットしていった。その結果、想定通りのグラデーションが実現した。



図9 階段壁面の田井ノ浜(美波病院)[撮影:田中 佳]

THALコンテスト入賞作品の採用

美波病院でのホスピタルアートには地域の人たちのアイディアも取り入れることにした。Tokudai Hospital Art Labo (THAL) では2020年3月に「おうちでろう! マスキングテープアート」というコンテストを開催していた。同時期に突然学校が休校になり、楽しみを奪われた子どもたちに自宅で熱中できることを提供するとともに、家族にも喜んでもらいたいという思いから、県内の高校生以下を対象に、自宅の壁にマスキングテープで作った作品を写真に撮って応募してもらった。優秀作のアイディアはわたしたちのホスピタルアート制作に採用することにした。

集まった力作の中から、制作者の許可を取った上で、鳥と太陽のモチーフを美波病院で再現した。鳥は待合室に設置し(後述)、太陽は海の風景に挿入した(前図参照)。制作者とご家族はいずれもホスピタルアートへの採用を喜び、激励して下さった。

このような形で地域の人と病院を結び付けることで、将来的にホスピタルアートへの理解や支援が広まっていくのではないかと考えている。2021年3月には第2回のコンテスト「病院に届けよう! マスキングテープアート」を開催した。今度は対象を子どもや生徒に限定せず、コロナ禍で緊張感が高まる医療従事者や入院患者へ感謝や励ましを届けようという趣旨で、マスキングテープを使った鳥のアイディアを募集した。今後の病院への設置に向けて、現在、優秀作を再現するための試作を行っているところである。

粘着シートの活用

フィルム方式を用いた木々や海のほかに、地域の花々とお遍路さん、鳥を待合スペースに制作することにした。これまではこうしたモチーフも現場の壁に直接制作していたが、今回はあらかじめ作ったものを持ち込み、現場ではそれを貼り付けるだけで済むようにした。

鳥とお遍路さんについては「mt CASA SHEET」という230mm四方の粘着シートを使用した。両面テープのようにセパレーターを剥がすことで貼り付けることができ、マスキングテープ同様きれいに剥がすこともできるというもので、室内のリメイクなどを念頭に開発された商品である。わたしたちは鳥とお遍路さんの型紙を作り、これに合わせてシートをカットしておき、現場ではセパレーターを剥がして壁に貼り付けた(図10,11)。この方法制作時間の短縮という意味でももちろん有効だったが、高所や床に近い部分に手軽にモチーフを設置できるというメリットもあった。



図10 待合スペースの鳥、花、お遍路さん[撮影:田中 佳]



図11 階段壁面のお遍路さん[撮影:田中 佳]

花については、同じく230mm四方の「mt CASA SHEET」のシリーズで、漆喰の抗菌・抗菌ウイルス・防臭などの機能性を施した漆喰シートを利用し、その上にあらかじめマスキングテープでモチーフを作っておいた。制作したのは美波町の花である桜、旧由岐町の花である椿、県下唯一の群生地が近隣にあるはまぼうの3種である。これらをアクセントタイルのように壁面最下部に貼り付けた。

以上のように、院外で事前に作業できるものはすべて準備して、院内での制作を最大限短縮するよう努めた。その結果、感染が落ち着いている時期に3回、現場で作業することで完成させることができた。1回目は平日の午後遅くから3時間ほど、外来患者がほぼいない状態で作業した。2回目の休日の作業ではほぼ出来上がり、3回目はやはり平日の午後遅くから仕上げを少々行った。

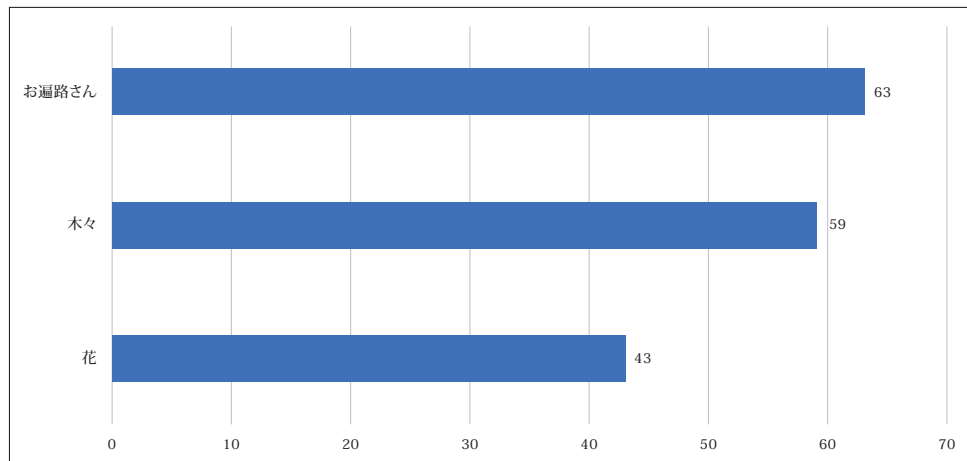


図10 粘着シートを用いた花の制作[撮影:田中 佳]

3. 職員アンケート

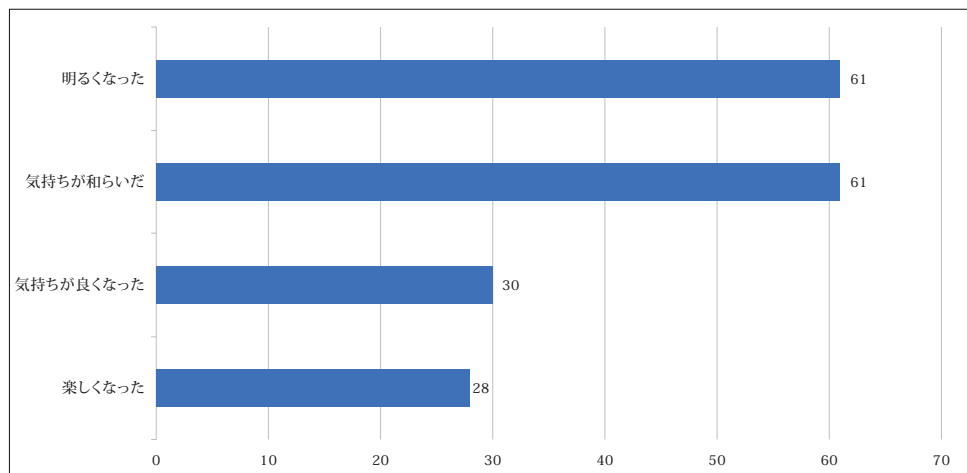
制作後1カ月ほど経った2021年2月に、美波病院の職員を対象としたアンケートを実施した。無記名で個人が特定されないように行った。病院の協力により、ほぼ全職員からの回答をえることができた(回答総数54)。質問事項は以下の6点であり、これに自由記述欄を設けた。以下、それぞれの質問項目に関して上位3位(もしくは4位)までの結果をまとめる(単位はいずれも%)。

Q1. 今回制作した作品で気に入られたものがあれば教えてください。(複数回答可)



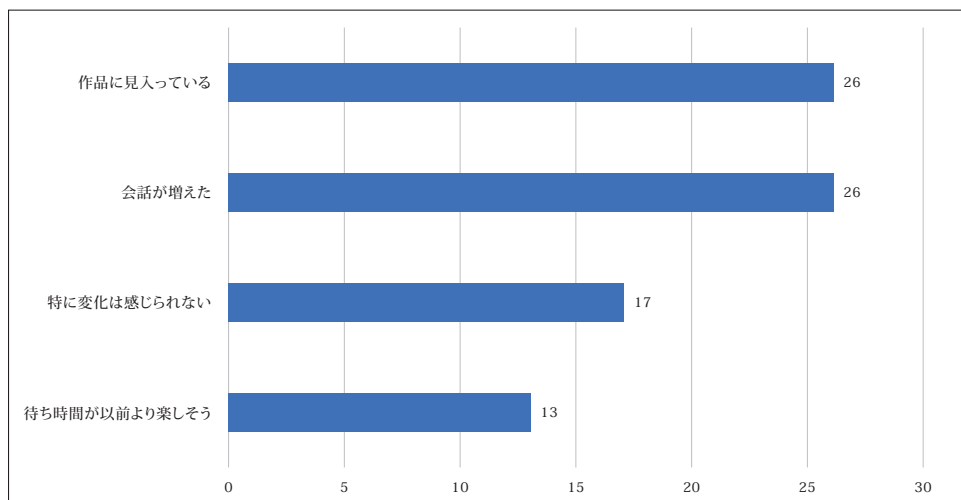
「お遍路さん」は、空間の中ではごく小さな存在であったため、一番人気となったのは意外であった。過去には病院という場には不適切ではないかという声もあり、後に撤去されたこともあった[田中・永廣,2021]⁴⁾。今回人気だったのは、近くに四国八十八カ所第23番札所で厄除け祈願でも有名な薬王寺があり、病院近辺を日常的にお遍路さんが歩いているため、親近感があったものと思われる。この結果から、同じモチーフでも地域や環境によって好感度が大きく異なることが分かり、地域に根差した内容の重要性が浮き彫りになった。

Q2. アートを導入したことによって、ご自身にどのような変化を感じられましたか。(複数回答可)



職員通用扉周辺を装飾したことで、職員が日常的にアートを目にすることができ、心理的な効果を実感していることが分かった。「ごちゃごちゃした」「圧迫感を感じた」などのマイナスの効果を示す選択肢を選んだ回答は皆無であった。その効果の高さゆえか、患者さんも目にすることができるよう、もっと目立つところに導入してほしいという意見も自由記述欄に見られた。

Q3. アートを導入したことによって、患者さんに変化が感じられましたか。(複数回答可)



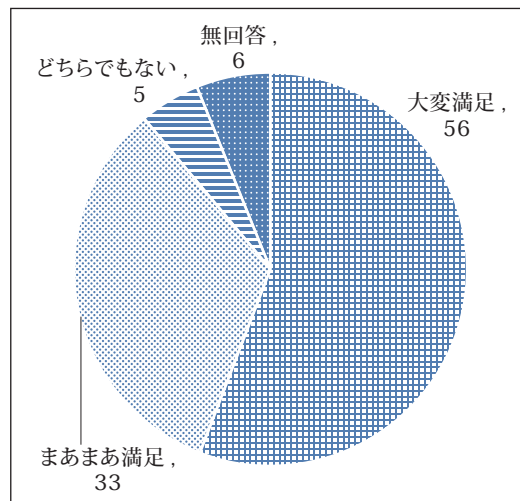
コロナ禍に配慮して、患者さんに直接アンケートを取ることは憚られたため、職員から見た患者さんの変化を回答してもらった。アートを見るよう積極的に勧めることができなかったという声もあったが、それでもアートに自ら目を向け、良い効果が表れた患者さんもいたことが分かった。特に平時よりも会話が控えられている状況で、「会話が增えた」患者さんが見られたのは注目すべき結果ではないだろうか。

Q4. 今後、アートをリニューアルしたり増やしたりする機会があれば、どのようなものを望まれますか。(場所、内容)

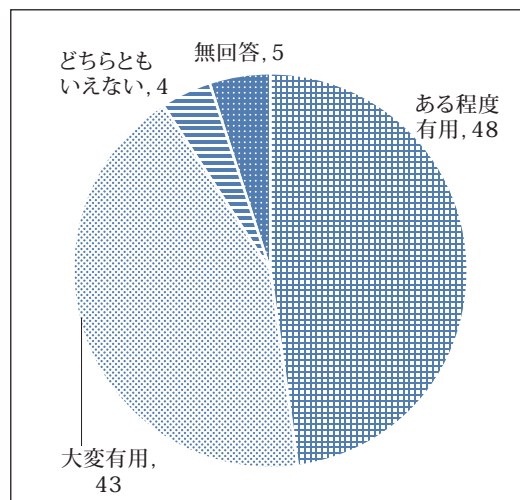
- ・玄関、病棟、談話室
- ・季節によって変えられるもの
- ・お遍路さんを増やしてほしい
- ・明るい感じのもの
- ・地域の特性を感じられるもの

今後の設置場所としては、患者さんが目につきやすい場所への要望が多かった。テレビ報道を見た地域の方がわざわざ探しに来たという報告もあったので⁵⁾、患者さんや地域の人の関心は高いと思われる。制作内容としては、今回取り入れたお遍路さんや地域性のあるものの増設希望が多かったことから、選択はおおむね好評だったと判断される。コロナ禍であったため、これまでわたしたちが取り組んできた季節毎にリメイクできるようなものは断念したが、今後は様子を見ながら取り入れていきたい。

Q5.全体として、今回のホスピタルアートの満足度はどの程度ですか。



Q6.ホスピタルアートは患者さんにとって有用だと思われますか。



美波病院では初めてのホスピタルアート導入となったが、職員の満足度は非常に高く、また患者さんへの有用性も実感されていることが明らかとなった。現場での滞在時間が短く、これまでの制作に比べて職員との触れ合いが極端に少なかったため、この結果には安堵した。しかしさらに満足度を高め、患者への有用性をより実感してもらえるよう努力しなければならない。

おわりに

コロナ禍ではあったが、美波病院では感染拡大の合間を縫ってなんとかホスピタルアートを導入することができた。これは全国的に見れば感染が低く抑えられていた徳島県だからこそ可能であった例外的な幸運といえるかもしれない。アートが取り入れられたことで病院職員の緊張は多少なりとも和らぎ、院内の雰囲気も明るくなったという結果が明らかとなった。今回はフィルムや粘着シートを使用して、事前に院外で準備をしたものを現場に持ち込んで制作するという新手法を取った最初の事例であったが、従来と比べて制作時間は大幅に短縮したうえ、職員満足度も非常に高かったことから、一応の成功は認めて良いと思われる。

ただし、現場での時間短縮により断念せざるをえなかった要素ももちろん存在する。まずデザインに関しては、シート等を用いて制作できるものに限定したため、細やかで手の込んだものを作ることではできなかった。今後の洗練がひとつの課題となるだろう。また現場で制作に時間をかけることで、職員や患者に作品が少しずつ仕上がっていく過程を共有してもらい、楽しみにしてもらうという場作りは叶わなかったため、アートを「自分事」としてとらえてもらうことは難しかったと思われる。しかし本来、マスキングテープによるアートの良さは、制作過程をも共有でき、場合によっては職員や患者とのコラボレーションも可能という点にある。「気が付いたらアートがあった」ということであれば、プロのアーティストによる完成作を持ってきて設置することと変わらない。

いずれもコロナ禍においては望むべくもないが、今後はこうした欠落を別の側面から補う方法の開発も考えていく必要があるだろう。制作自体の共有という意味ではオンラインワークショップの実施も可能かもしれない。また現場での作業自体は限定するにしても、制作段階ごとに少し時間を空けるといった時期の設定により、「できあがっていく楽しみ」を時間とともに共有してもらえるかもしれない。あるいは作品のmaking storyを説明した資料や映像などを併設することも考えられる。こうした補助的な手段を併用し、現場の作品ばかりでなく制作過程をも多くの人と「共有」することが、ホスピタルアート導入の効果を高めることにつながるのではないだろうか。

他方、今回開発したフィルムやシートを用いる新手法は、院外からホスピタルアートの制作に関与できる可能性を広げた。この性質を利用すれば、今後はより広くコミュニティや遠隔へも制作への参加を呼びかけることができる。このことは、これまで病院内にいる人々のことを気に留めたことがないような人たちにも関心を持ってもらい、ホスピタルアートの意義についての理解を広めるきっかけになるのではないだろうか。

謝辞

コロナ禍においてアート導入をご英断いただいた美波町国民健康保険美波病院院長の本田 壮一先生、ならびにご多忙の中アンケートにご協力いただいた職員の皆様に深謝申し上げます。

註

- 1)この方法については THAL のweb サイトで動画を公開しているので参照されたい。
<http://www.tokudaithal.com/>
- 2)この時の制作の様子は「mt」のweb サイトで公開されている。「コロナ禍に癒しを届ける mt× ホスピタルアート～Tokudai Hospital Art Labo の取り組み～」
<https://www.masking-tape.jp/sp/news/2021/06/tokudai-hospital-art-labo.html>
- 3)美波町国民健康保険美波病院 web サイト <https://www.town.minami.lg.jp/minami-byoin/>
- 4)この件については学会の口頭発表でも紹介した。田中佳・川端ひな「マスキングテープを用いたホスピタルアートの可能性」アートミーツケア学会2019年大会、2019年11月24日(於:近畿大学)。
- 5)美波病院のホスピタルアート制作についてはテレビで複数回紹介された。「コロナ禍の医療現場アートで癒やしを」NHK 徳島放送局「とく6 徳島」特集、2021年4月28日;「『ホスピタルアート』で医療現場に癒やしを」NHK ニュース「おはよう日本」2021年5月25日; "Washi Tape Art Brings Cheer to Hospital", NHK World-Japan "News", June 25, 2021.

参考文献

- 田中佳,2020-1,「[実践報告]健康と癒しの両立を目指して—徳島大学病院におけるマスキングテープアートの試み(2018 年度)—」『アートミーツケア』(オンラインジャーナル),奈良,アートミーツケア学会,Vol.11,pp.55-66.
- 田中佳,2020-2,「マスキングテープを活用したホスピタルアート制作」『日本統合医療学会四国支部会報』,徳島,日本統合医療学会四国支部, Vol.13,pp. 14-15.
- 田中佳,川端ひな,2020,「コロナ禍におけるホスピタルアートの普及を目指す取り組み」『日本統合医療学会四国支部会報』,徳島,日本統合医療学会四国支部,Vol.13,pp. 100-101.
- Tanaka K., Nagahiro S., Bando H., 2020-1, "Beneficial Art in Hospitals with Masking Tape Initiated from University Hospital", Journal of Biomedical and Clinical Case Reports, London, Asploro, 3(3), pp.202-206.
- Tanaka K., Nagahiro S., Bando H., 2020-2, "Psychologically comfortable seasonal images for the project on the art in hospitals", Arts & Humanities Open Access Journal, Edmond, MedCrave, 4(5), 187-189.
- Nagahiro S., Tanaka K., Bando H., Bando M., Nishizaki M., Goto S., 2021, "Masking Tape Art-Work May Provide Beneficial Positive Effects", Edelweiss Journal of Biomedical Research and Review, 3, pp.5-8.
- 田中佳,永廣信治,2021,「[実践報告]ホスピタルアートの普及を目指して—徳島の医療・福祉施設におけるマスキングテープアートの広がり—」『アートミーツケア』(オンラインジャーナル),奈良,アートミーツケア学会,Vol.12,pp.1-11.